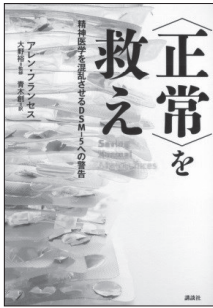


## ■ 書 評



＜正常＞を救え—精神医学を混乱させる DSM-5 への警告—

アレン・フランセス 著

大野 裕 監訳

青木 創 訳

講談社

2013年10月 446頁

本体価格 2,000 円＋税

2013年5月アメリカ精神医学会より、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders fifth edition (DSM-5) が出版された。前版である DSM-IV から数えると実に 19 年ぶりの本格的な改訂であった。現在 DSM が精神科領域全般に与える影響は極めて大きい。特に DSM-III はそれまで主観的な判断のみにより与えられていた診断に一定の枠組みを与えた意味では、さながら医師間に「共通言語」が作られたようなものであった。このため近年では、若手精神科医や研修医が DSM を片手に、目の前の患者を診断基準に当てはめようと悪戦苦闘している姿をしばしば目にする。また先日、評者の同僚が患者に病名告知を行ったところ、患者の家族から「その病名は最近出版された DSM-5 ではどのようになっているのか？」と尋ねられたことを耳にした。

さて、このように専門家、非専門家を問わず大きな影響を及ぼすようになった DSM であるが、その新版では近年の研究成果をもとに大きな改訂がなされている。詳細は実際の DSM-5 を参照して頂きたいが、変更点の中には診断基準の拡大と解釈できる部分が散見される。この現状に対し声高に非難を行ってきたのが、本書の著者であり、かつて DSM-IV の作成委員長を務めたアレン・フランセス氏である。氏はしばしばマスメディアに取り上げられるため、既に主張の大半を知っておられる読者もおられるかもしれない。

本書の中ではしばしば「診断のインフレーション」や「診断の流行」というキーワードが問題点を指し示すうえで用いられている。つまりは診断基準やその解釈の拡大、それに伴う患者人口の増加ということの意味しているのであるが、この何が問題なのかについて本書では多くの頁が割かれている。その答えは、著者

の言葉を借りるならば、「診断のインフレは『正常』をおびやかす、精神科医療における著しく過剰な治療へと繋がっている」からであろう。製薬メーカーが自社製品の使用対象者を増やすために、「おおむね健康」な人に対しても「いくらか病気」と思わせることに腐心していることは言うまでもない。また、医師側も自らの専門領域を少しでも拡大させるための行動を知らぬ間に行っていることがある。その結果、精神疾患の診断は高感度、低特異度な状態になり、陽性的中率が低下する。つまり、本来の意味での絶対的病者ではなく、自らが回復可能な正常者まで精神疾患の診断を行い、その本来持っている回復力までを阻害してしまうことを筆者は危惧している。もちろん、現在の「流行」となってしまう注意欠陥・多動性障害や小児双極性障害、自閉症、双極 II 型障害、社交不安障害、大うつ病性障害、心的外傷後ストレス障害などの「流行」は DSM-IV の存在なくして語れないものである。この点について筆者は真摯に反省の弁を述べ、それに立脚し、DSM-5 から予見される次に訪れる可能性の高い「流行」について警鐘を鳴らしている。

多くの問題があるから、頭ごなしに「DSM-5」は使えない、使わない、という態度を取ることは容易であろう。しかし、本来 DSM は何も精神医学の全てを明らかにした絶対的な「バイブル」ではない。個人や状況に根ざす要因が組み込まれず、医師間の診断一致率を高めるために DSM は単純な体裁を取っているからだ。人間の最も複雑な器官である脳を取り扱っている精神医学は根源的に複雑なものである。しかし、それが過ぎれば診断のバラツキは大きくなる。このため、DSM のような単純な「共通言語」が必要となるのだろう。その意味では DSM は誕生から一定の問題を内包した鬼子と言えるのかもしれない。

精神科医は常に精神医学の複雑さに敬意を持ちながらも、今後も実用的な診断基準の運用を迫られるだろう。その際、本書が持つ厳しい批判の目を常に忘れてはならない。

「＜正常＞を救え」、何とも刺激的なタイトルな本書であるが、日本語訳が刊行されれば、DSM-5 は白衣のポケットや診察室に置き、本書は自宅や医局などで是非ゆっくり一読頂きたい良書である。

(嶽北佳輝)